九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

北京に行ったころのこと

那須, 清
北九州市立大学外国語学部教授, 九州大学名誉教授

https://doi.org/10.15017/9754

出版情報：中国文学論集. 11, pp.21-25, 1982-10-01. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

北京へ行ったころのこと

那須　清

このたび一身上の都合により九大を退職致しました。三十二年あまりもおせわになりましたが、この間の自分を省みますと「濫竽充數」ということばがぴったり當てはまるような氣がして、誠にお恥ずかしい次第です。このような私のために記念號を編集して下さるということですが、身に餘る光榮に存じます。新しい職場勤めの上に、家の賣買など馴れぬ雜用が重なり、落付いてものを書く餘裕がありません——實は平素の不勉强をごまかす言い逃れですが——そこで、私の北京へ行ったころのでき事を二三書いてみたいと思います。

注音符號どおりの發音

北京驛から外へ出ると、大勢の人力車夫が「車不要？」と言いながら寄って來ます。その聲を初めて耳にした私は、「注音符號」どおりの發音であるのに驚きました。私が中國語學習を志したきっかけが、南京の胡蝶と呼ばれていた名アナの美しい發音であったことは、教養部の紀要に書きましたが、アナウンサーの發音がきれいなのは、職業がらと言えます。私が驚いたのは、北京の人がみんな「注音符號」どおりの發音をしていたことです。

北京語の發音を基にして注音符號を作ったのですから、これは至極あたりまえのことですが、とにかくびっくりし、中國語をものにしたいという氣持ちが湧いて來ました。

ある日、西直門外にいた友人を尋ねたところ、道がわからず、客待ちしていた人力車夫に「西直門去怎麼走好？」と聞いてみました。ところが相手はわからないと言うのです。もう一度、愼重に正確な發音で聞きましたが、やはり「不懂」という返事が返って來ました。やむを得ず紙片に書いて示すと「O！西直門哪！往西走」と敎えてくれました。漢字では發音が表わせないので、この時のやりとりを再現できません。私の發音は、一字一字については必ずしも惡かったのではありませんが、一つの地名としてのまとまりがなかったため通じなかったのでしょう。このことがあってから、すべて物事はマクロ的に正しく把握することが大切だということがわかりました。しかしそれを實行するのは、私の性格上至難なことで、いつも失敗しています。

中國人とまちがえられた話

私の家のあった旅順から北京へ行くには、二つのコースがありました。一つは連京線から奉山線に乘り換えるコース、もう一つは大連港から天津へ向かう海路です。汽車の旅は時間的に早く着きますが疲れるので、私はいつも海路の旅を樂しんでいました。

天津接近の時間が干潮とかち合うと、大沽沖で潮待ちすることになります。その間、蜜に群がる蟻のように小舟が汽船を圍み、いろいろな土產物を賣り込みに上がって來ます。ジョニ黑やスリーキャッスルが市價の1/3以下な

のに驚き、喜んで買ったものの吸ってみると、中國の安タバコにもはるかに劣るにせ物だとわかり、腹を立ててみても、船はもう錨を上げて動き出しています。

日華事變の最中でしたので、下船するとき日本人と中國人とは別々に税關檢査を受けることになっていました。私が並んだ相手の税關吏が中國人だったので、少し覺えていた中國語で「都是手使的零碎東西」と言いますと、その税關吏はむつかしい顔付きで「中國人不許這兒來」と言うではありませんか。私は思わず心の中で「あっ」と叫びました。その時は天津の租界を日本軍が封鎖しており、驛へ行くには租界の外を廻って行かねばなりませんでした。私が人力車に乘って檢問所を通過しようとすると、衞兵に車から降りろとどなられました。「きさま支那人だろう。皇軍がこうして護っているのに、ご苦勞さんの一言も言えんのか」と、さんざん油をしぼられました。

この日は二度も中國人扱いを受けましたが、全くちがった後味であったことは言うまでもありません。昭和十四年の夏のことであったと思います。

丼は洗わないほうがよい話

私が中國語を習った學校は、北京内城の東南角にあった小さな私塾のようなところで、晝休みには付近の食堂へ食事に出かけていました。ある日、數人の學友と入った店は、寢臺兼用の食卓——夜は食卓を竝べてその上に從業員が寢るようになっていた——が四つほど置いてある、うす汚い一膳めし屋でした。おぼえたての中國語で「十二兩素湯麵、來四碗！」と注文したところまではよかったのですが、先客の丼を洗いもせず、それに麵をつぎ足して

北京へ行ったころのこと（那須清）

持って來たのにはあきれました。E君が思わず「きたない、洗って來い」と言うと、伙計は「好好」と二つ返事で丼をどろどろの水にざぶっと漬け、まっ黑な雜巾でさっと拭いて持って來ました。見ると、丼のふちにどす黑い汚れがべっとりついているではありませんか。「ああ、洗わせるんじゃなかった」とE君は目をつぶってうどんを飲みこみました。

今日、食堂の調理場を見ていると、洗劑の槽に漬けた食器に、ほんの形だけすすぎ水をかけているところがありますが、先客の丼を洗わずに使うのと、はたしてどちらが衞生的であると言えましょうか。

昭和十六年十二月八日

最後に蛇足を一つ加えます。

その日の朝、私は王府井大街を一人で歩いていました。なぜかいつもに似ず人通りが全くないのです。數日前から洋モクが一齊に姿を消し、公寓のおやじに賴んだり顏見知りのタバコ屋に中國語で賴むと、こっそり一つだけ出してくれるのがふしぎな氣もちでした。その日も東安市場の横口から入った行きつけの店で、ルビークインをくれと言ったところ、「沒有沒有」とそっけない返事です。きのうまであったのが今日急になくなるはずはなかろうと詰問すると、あることはあるが、紅錫包(ルビークイン)はない、三砲臺(スリーキャッスル)をいつもの五倍の値段ならどうだ、と机の下から一箱だけ見せるのです。そんなべらぼうな、と私は足早に立去り學校へ急ぎました。

ラジオは持たず新聞も取っていない私は、しかし、異常な街の空氣を感じつつ教室に近づくと、中から學友たち

のはりのある聲が聞こえて來ました。「アメリカは小手調べで次はドイツをやっつけるのだ」「いや、次はソ連で、ドイツは最後だそうだ」などと言う喊聲があがっています。息を切らして教室へとびこんで來た某君が「交民巷の城壁の上に山砲が据えてあるぞ」（東交民巷にはアメリカ海兵隊が駐留していました）とどなりました。私は事の次第が解せないので「ドイツとが山砲とか、いったい何の話だ」と尋ねると、「おめでたい奴だな。眞珠灣の米艦隊は全滅だ、日本がアメリカに勝ったのだ、ワッハッハ」と豪快な笑いが返って來ました。

日米開戦の日のことはこれだけしかおぼえていません。

今、私の手許に北京驛の待合室が撮った44判の寫眞が一枚あります。昭和十七年九月、アルゼンカメラ、F4・5、開放、1/10というデータがついています。暗い室内で、憲兵の目をかすめて撮った傑作です。この日、私たちが見送ったN君は沖縄上空で散華しました。昭和十六年十二月八日、私たちの人生劇場はどんでん返しを食らったのです。